

Pollmann, Karla.

‘Augustine, Genesis, and Controversy’. *Augustinian Studies*, 38:1 (2007), 203-216.

上村直樹

聖書解釈の多様な可能性に言及する『告白録』のテキスト (13.24.36) に着目する Karla Pollmann は、すでに幾度となく註解されたテキストからもさらに多様な解釈を汲みとりうるという示唆を見出し、アウグスティヌス自身が繰り返しかえし取りくんだ創世記註解群に焦点をあてるとともに、そこで実践された解釈の方法と意図を考察する。たとえば、ヒエロニムスのような細密な文献学的読解が示されたわけでないが、アウグスティヌスにあっては、他の註解者の成果を受け入れ、聖書テキスト相互の総体的な連関性を見出そうとする企図が明らかである。そして、聖書解釈には、知的な営為と実践的な営為を通して聖書のメッセージを自己の生へ組みこんでゆく働きのあったことが示される。ついで、『創世記についてマニ教徒に対して』、『告白録』、『創世記逐語註解』、『神の国』における解釈法が概括される。たとえば、『告白録』におけるアレゴリカルな聖書釈義は、狭義での註解というよりはむしろ、自己の存在をその創造者に負っている人間と、自由で恵みにみちた全ての創造者である神との実存的な関係性を解明することに集中したと理解される。アウグスティヌスの釈義は、その方法を対象とする読者によって規定されるとともに、つねに解釈者を知的に、かつ倫理的に教化するという目的、神を創造主として、かつ世界の救世主として捉えるという目的を有していたことが指摘される。